

< 研究論文 >

美術作品の制作と研究の関係性について：
芸術実践論文（美術）の分析を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅, 実花 メールアドレス: 所属:
URL	https://geidai.repo.nii.ac.jp/records/2000469

美術作品の制作と研究の関係性について

— 芸術実践論文（美術）の分析を通して —

The relationship between artistic production and research study
— through analyzing over the practice-based thesis in Fine Art —

菅 実花
(美術作家)

要 旨

本稿は、東京藝術大学大学院博士後期課程の実技系（芸術実践領域）博士プログラムにおける芸術実践論文の分析を通して、美術作品の制作と研究の関係性を明確にすることを目的とする。そのため『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』（2013）を参考に、2013年度から2020年度にかけて受理された芸大の美術分野の博士論文224編の論文構成の分析を行った。芸術実践論文における自作の位置付けを縦軸に、研究手法を横軸にした4象限の図にマッピングした結果、縦軸は「自作を論の根拠にする」構成から「自作の意義を論の結論にする」構成まで、横軸は「理論」主導の手法から「データ」主導の手法まで幅広く分布した。専攻ごとに大まかな傾向は見られたが、個々の作品や思考によって論文構成が決定されることが明らかになった。また芸術実践論文は、学術論文の形式に則ることは必須だが、芸術実践に基づく研究として、多様な論文構成が許容されていた。そのうちの一例として筆者の博士論文『人形写真論』（2020）をあげ、当時の考えと制作について振り返ることで、制作と研究は同時進行することを明らかにした。根本的に双方のプロセスが類似していることから、制作と研究はパラレルな関係にあると結論づけた。

キーワード：芸術実践と研究 美術系博士 芸術実践領域博士プログラム

abstract

This paper aims to clarify the relationship between the production of art works and research through an analysis of artistic practice theses in the doctoral programme in practical arts (artistic practice area) at Tokyo University of the Arts. For this purpose, an analysis of the thesis structure of 224 doctoral theses in the field of art at the Faculty of Fine Arts at the Tokyo University of the Arts received between 2013 and 2020 was conducted with reference to the Report on the Outcomes of the Art Research Centre, Tokyo University of the Arts (2013). The position of the author's artistic work in the art practice paper is mapped on the vertical axis and the research method on the horizontal axis in a four-quadrant diagram. The position of the author's artistic work in the art practice paper is mapped on the vertical axis and the research method on the horizontal axis in a four-quadrant diagram. The results showed a wide distribution on the vertical axis, ranging from the structure of papers that 'use their own work as the basis for their argument' to the structure of theses that 'use the significance of their own work as the conclusion of their argument', and on the horizontal axis, from theory-oriented theses to data-oriented theses. Although broad trends were observed across majors, it was clear that the individual work and thinking determined the structure of the thesis. In addition, although it was essential for the art practice thesis to follow the

format of an academic thesis, a variety of thesis structures were permitted as research based on art practice. One example is the author's Theory of Doll Photography (2020), which clarified that production and research proceed simultaneously by reflecting on her thinking and production at the time. The fundamental similarity of both processes led to the conclusion that production and research are in a parallel relationship.

Key word : Artistic and research activities Doctor of Fine Art Practice based doctoral program

はじめに

東京藝術大学（以下、芸大）の博士課程は1977年に設置され、現在では美術研究科だけでも毎年約30人程度が学位を取得している。この芸大の博士プログラムでは、「博士論文等の審査及び試験に合格すること」が修了要件と定められている。そのうち実技系の研究領域では、博士論文だけでなく「研究作品又は研究演奏を加える」こととされている¹。これらの「芸術実践に基づく研究」を行う「芸術実践領域（実技系）博士プログラム」は、博士学位申請のために発表された作品や演奏等の創造プロセスで実施された研究について記述した「芸術実践論文」の発表が義務付けられている²。

しかし、おそらく芸術実践論文は、一般的な学術論文ほどの精度ではなく、作品に付随する解説文だと思われているため、学内外の誰からもほとんど参照されないものになっていると考えられる。その理由は、芸術の実践者が自ら執筆するという芸術実践論文ならではの意義、つまり、作品制作と研究の関係性が不明瞭だからではないだろうか。

第三者が美術作品について文章を書く「アトライティング」をテーマとした書籍や、いわゆる一般大学向けの論文の書き方の教科書は数多く出版されている³。ところが、芸術大学の実技系専攻に所属する学生が、制作者として自らの作品について論じる芸術実践論文についての解説書はほとんど存在していない状況である⁴。唯一の専門的な資料としては、『東京藝術大学 芸術リサーチセンター 成果報告書』（以下、成果報告書）がある。芸術リサーチセンターは、芸術系大学院の芸術実践領域（作品制作や演奏等の実技専攻領域）における博士学位のあり方に関する研究を目的に、芸大に2008年度から2012年度にかけて設置された機関である。課程博士学位審査及び授与システムに関する調査を国内外において実施し、実技の作品と共に審査の対象となる研究論文の執筆について、その指導体制、評価体制の研究を行った⁵。それをまとめたものが成果報告書である。

芸術実践に基づく各々の研究は複数の分野にまたがっており、研究手法も様々であるため、成果報告書にまとめられた内容はやや抽象的な水準に止まっている。この成果報告書だけを読んで、芸術実践論文を具体的に理解することは難しいだろう。芸術実践領域の博士プログラムや芸術実践論文の大

枠については簡潔に記述されているが、詳細については実際に執筆された個々の論文に関する所感の報告の集積となっている。だとすれば、成果報告書が発行された後の約10年間の間に執筆された芸術実践論文によって、その総体も変化している可能性がある。

本稿では、芸術の実践者が自ら執筆するという芸術実践論文ならではの意義を明らかにするため、芸大の芸術実践領域（実技系）博士プログラムにおける芸術実践論文のうち、美術を対象を絞り、美術作品の制作と研究の関係性を探ることを目的とする。

第一節では、論の前提となる情報を確認するために、まずアーティストが書く論文以外の文章の性質について確認する。次に、学術研究の中の芸術実践論文の位置付けを確認する。そして、芸術実践論文の研究目的や手法、論文の構成、論文執筆のメリット・デメリットなどをあげていく。

第二節では、2013年度から2020年度までの芸術実践論文をマッピングし、現在の傾向を分析する。成果報告書は指導にあたった教員（芸術学）によって記述されているが、筆者は2020年度に芸術実践論文を執筆した立場から、筆者自身の博士論文『人形写真論』の要旨を例にあげて、分析した手法を解説する。また実際に芸術実践論文を書いた当時のことを、作品制作を含めて振り返ることで、より具体的な制作と研究の関係性を考える題材とする。そして、そこから導き出された作品制作と研究の根本的な類似を指摘する。以上から、研究は作品制作と平行な関係であることを結論づける。

芸術実践論文は、美術作家がアーティストの立場のまま研究者と繋がることができ、作家活動を学際的に発展させる可能性を秘めたものなのだと、筆者は確信している⁶。本稿では、その理由を芸術実践論文の執筆者自らが分析することで、制作と研究の関係性を明らかにし、第三者による研究でも、アーティストイックな語りや文学的な文章表現でもない、芸術実践論文ならではの意義を示す。

1 前提となる情報

1.1 美術作家が書く作品についての文章

美術大学の実技系専攻の学生の多くは、作品制作等の実技に比べて、文章を書くことを苦手としている。専攻の課題のほとんどは実技による成果のみが求められ、提出の際に言葉によるプレゼンテーションや解説文を付け足すと「作品がものとして語るができている。クオリティが低いことの証明になっている」と批判されることも多い。そのため、博士課程で芸術実践論文に取り組む際にも、「言葉では伝わらないから作品を制作しているのに」、「文章で説明できる作品は良いものではない」という免罪符を用いる傾向にある。だが、実際には作家活動を行うにあたって、書類を作成する

中で作品について書く機会が多い。まずは美術作家が書く、論文以外の文章についてを確認する。

それらは作品制作の前に執筆し発表前に完結するもの、作品の制作中に執筆し発表と同時に公開するもの、作品発表後に執筆し展覧会とは別のタイミングで公開するものと大きく3つに分けられる。

活動するジャンルによっては馴染みがない場合がある。しかし、例えば芸大内の藝祭（学園祭）で展示場所を借りてグループで発表するときに企画書やプロポーザルが必要だったり、あるいは卒業制作展⁸で専攻ごとの図録を作るといった場合に各々がステートメントを掲載したり、専攻によっては修士課程に進学する際に小論文が求められることもある。博士課程に進学する以前に、これらの文章を作成する機会は訪れるものだ。

このように、作品について文章で表すことはごく当たり前に行われていることである。それどころか、アーティストによるエッセイや論考は歴史的にも多く存在している。その内容は自伝的要素が強かったり、教育目的であったり、啓蒙的であったりと様々である。共通して一つ言えるのは、美術作品と文章は決して相容れないものではないということだ。

表1 美術作家が書く書類と文章

制作前に執筆	企画書	展覧会の企画をプレゼンする書類。概要、目的、独自性、何をどのように表現するのかを簡潔に示す。展覧会企画の公募展や、助成金の応募、学芸員に具体的な展覧会企画を伝えるときに提出する。
	プロポーザル	作品の物理的なサイズや素材、形式、設置方法などを図とともにわかりやすく示したもの。学芸員やインストーラーと作品の設置について共有するときや、グループ展など複数の作家がいる時の場所決めの時に使用する。
制作中に執筆	ステートメント	作品のテーマについての文章。作品そのものに言及しなくても成立する。アーティストが表現したいテーマに合わせて柔軟に文体を選んだりと比較的自由度の高い形式。日記的、会話形式、宣言文風、学術的なものなどもある ⁷ 。展覧会のハンドアウトに掲載し、鑑賞者が持ち帰れるものが多い。ポートフォリオに載せる場合もある。
	作品解説	作品のモチーフや物理的な素材サイズ、構造などの客観的な記述。視覚的なあらわれを作品を未見の人に伝える役割。作家本人ではなく学芸員が書く場合もある。広報での展覧会紹介などに見られる。
制作後に執筆	エッセイ	作品にまつわる考えや出来事などを綴った文章。エッセイとして独立した文章表現が優先される。傾向としては比較的短文で雑誌に掲載されることが多い。
	論考	作品制作を通して得た知見を論理的な構造を持って構成した文章。その作家独自の芸術論。技術や、思想、背景など、作家によって内容は様々である。書籍として出版される。

しかしながら、これらの表1にまとめた文章は狭義の学術論文の枠組みからは逸脱するものである。上記のアーティストが書く文章と、論文の違いを明らかにするために、芸術実践論文についての定義を確認していく。

1.2 芸術実践研究とは何か

本項では、主に成果報告書の内容を抜粋して、使用する用語の整理を行う。美術作品を制作する作家が論文を書くという状況を前提として記述するが、成果報告書の中で美術・音楽に共通する項目として書かれている箇所を引用する際はそのまま使用する。本稿では博士論文における制作と研究の関係性について具体例を示すことを目的にしているため、博士課程のカリキュラムや指導、国際的な状況の比較について触れる分量は最小限にとどめる。

芸術実践研究における「研究」とは、大枠では一般的な学術研究と同じことを意味するが、テーマの設定の仕方が異なっている。まずは、「研究」についての定義から見ていきたい。表2で示す通り、成果報告書では勉強・調査と比較してこのようにまとめられている。

表2 芸術実践領域での「研究」とはなにか？
〔「成果報告書」25頁を参照し、筆者が作成〕

勉強	[既にあるもの（体系化されたもの）を] 学ぶこと、習得すること
調査	[何かを明らかにするために] 必要なデータ（資料となるもの）を集めること
研究	[未だ明らかにされていないことについて] 自ら問いを立て、その答えを明らかにすること

研究は、「未だ明らかにされていないことについて」を取り扱う、何らかの新規性（オリジナリティ）を伴うものである。今までに蓄積されてきた先行研究を批判的に検討し、問いと答えの両方を自分で設定する。まとめると、以下の表3に示した3点が研究の必要条件としてあげられる。

表3 研究に必要な条件
〔「研究の育て方」3頁⁹を参考に筆者が作成〕

新たな知見	既存の論を更新する新しい見解
新規性	オリジナリティがあること
先行研究の批判的検討	これまでの学問としての蓄積の上になされること

これらが含まれていない研究は、「未だに明らかにされていないことについて自ら問いを立てその

答えを明らかに」していても、学術研究とは言い難い。「研究の価値は自己満足（独りよがり）度の高さで決まるものではない。それが、他者からみても画期的なものであるかどうかで決まる¹⁰」のである。

学術研究はスタイルによって二つに分けられる。従来の学問的形態に何か新しい知を付け加える「純学問」と、実践の場で課題を見つけ出しそれに対する答えを探求するという「実践に基づく研究」（実践研究）である。

表4（「成果報告書」25頁を参考に筆者が作成）

純学問	すでに体系化された学問分野において、新たな知見を加えること。まずはその学問体系をマスターし、未踏の部分を見つけて、その部分を調査研究する。（例：歴史史料研究、哲学、理論物理学など）
実践研究	実際に何かをしている中で問題に感じた「解決すべき課題」を設定し、それに対する答えを追求すること。（例：防災学、臨床哲学、工学）

芸術のうち美術にまつわる研究に、芸術学や美術史、美学などがあるが、これらは純学問に分類される。例えば、分析美学の論文に「デジタル写真が一般的となった2010年代以降の状況を前提に、ケンダル・ウォルトンの『透明な画像』（1984）に批判的検討を加えることで、現代において『写真の透明性』が有効かどうかを明らかにする」といった論文が考えられる。この場合は、美学の中の分析美学と呼ばれるジャンルの中で、「描写の哲学」のうち「写真の透明性」についての体系化された先行研究がある。しかし「執筆された年代が古く現代の状況とは合わなくなっているため、それに対して新たな知見を加える」といった目的となる¹¹。執筆はあくまでも研究者の立場から行うものである。

一方で、制作者であるアーティストが自らの作品制作という実践に基づいて書く論文は、「実践に基づく研究」の中の「美術」という分類となる。それを指して「芸術実践に基づく研究」と呼び、その内容をまとめた論文が「芸術実践論文」である。

「実践に基づく研究」は、臨床心理学や看護学、教育研究等の分野で発展してきた経緯がある。これらの分野における方法論には、数値でデータを示す量的方法と、文章による記述を主にした質的方法とがあり、その両方を使用した混合研究方法もある。

すなわち、アーティストが行う芸術実践に基づく研究とは、学術的な実践研究のひとつであり、自らの芸術的実践を客観的に言語化し、実践の中で浮上した問題を探求し答えを第三者へと伝えることを目的としたものである。それを行う「芸術実践領域（実技系）博士プログラム」は作品制作や音楽演奏を主とする専攻や領域が対象となる。芸大においては「美術研究科の美術専攻（日本画、油画、彫刻、工芸、デザイン、建築、先端芸術表現）及び文化財保存学専攻、音楽研究科の音楽専攻（作曲、

声楽、鍵盤楽器、弦・管・打楽器、室内楽、古楽、指揮、邦楽)、映像研究科の映像メディア学専攻¹²⁾である。

「実践に基づく研究」(practice-based research)はイギリスで生まれた「芸術における研究的要素と研究における創造的要素の重なり合う部分を積極的に評価する¹³⁾」博士プログラムのひとつである。そのため、研究と芸術実践を独立した別個のものとして捉えるのではなく、「芸術実践を深めるための相互補完的なものと位置付け¹⁴⁾」ている。つまり芸術実践論文は、「作品や演奏等の背後にある自分の意図に関するエッセイ的解説や、芸術表現そのものを言語によって文学的に表現することを意味するのではない¹⁵⁾」。もちろん学術研究であるので、自ら問いを立て、答えは新たな知見として記述される必要がある。研究には新規性があり、先行研究(先行作品を含む)に批判的検討が加えられていなければならない。さらに、表6で例示する「研究の方法」について、どのような方法論を用いて探求するのかを論文の中で示しておくことが必須である。実践に基づく研究の一領域であるため、「芸術実践の中で疑問に感じたことを追究したり、芸術を実践する過程そのものについての批判的考察をおこなったりするものである¹⁶⁾」。

その内容を例に挙げると、次のようなものが考えられる。

表5 (「成果報告書」13頁より筆者が作成)

独自の芸術表現を支える創造プロセスを論じるもの
自分の作品や演奏等の核となるアイデアを言語化・文脈化するもの
芸術実践の中で自分自身と向き合うことによって得られた知見を客観的に論じるもの
自分の芸術実践で問題に感じていたテーマを抽出し、研究するもの

次に「芸術実践研究」のアプローチ方法について、具体的に見ていきたい。前述の表5の4例が「何を」論じるのかという例であったのに対して、後述する表6のアプローチの6例は「どのように」論じるのかにあたる。

芸術実践論文では、一般的に論文の最初の章の中心となる先行研究レビューの中に、作品や演奏等の先行例が含まれることがある。研究内容に適した方法を選択することが必要であるため、「従来の芸術研究で主流だった歴史的・美学的アプローチ以外にも、事例研究や参与観察研究といった経験主義的なアプローチも重要となる¹⁷⁾」。通常、表6にあげた複数の方法が組み合わせられて用いられる。成果報告書によると、どのように論を組み立てても良いわけではなく、以下のような注意が必要である。

どんな論文でも①は先行研究のレビューとして必須である。芸術実践領域の研究では、とくに②や③が重要になる。⑤や⑥も②と組み合わせて用いられることが想定される。どのアプローチを用いるかは、研究の目的によって決まる。ただし、いずれの場合でも、どのような方法を用いて研究をおこなうかということについては、論文の中で明確に記述する必要がある（方法論の明確化）¹⁸。

表6 研究のアプローチ方法
 (「成果報告書」26頁より筆者が作成)

①文献研究	先行研究を吟味し、新しい視点や解釈を見つける。論文の最初に置かれる先行研究レビューは、これの一種。芸術実践領域の研究では、先行事例の検証ということも考えられる。
②アクションリサーチ	次の参与観察に似ているが、実際に自分が何かアクションをおこすことで、それがどのような作用を及ぼすかを記録し、省察する（振り返る）。芸術実践領域の研究では、自分の芸術実践の過程を記録・省察する、あるいは、誰かとともに何かを試み（教育的な実践など）それについて記録・省察する、というようなことが考えられる。
③参与観察研究	ある現場に出かけ、その集団に加わり、そこで行われていることを観察記録し、分析をおこなう。集団による作品制作に加わり、制作の過程を参与観察する、あるいは、アンサンブルに加わり、リハーサルを参与観察するなど。
④事例研究 (ケーススタディ)	一つ（複数）の事例を選び、その事例を調査する。従来にないユニークな教育やイベント、あるいはコンサートの一部始終を観察者として観察し、効果や問題点を指摘する。
⑤歴史的・分析的研究	資料やデータを収集分析し、未知の実態を明らかにする。過去の作品の成立や受容の背景を明らかにする。作品の分析から特質を抽出する。過去の作品や演奏について録音・録画に基づき詳細に分析する。
⑥仮説検証研究	最初に仮説を設定し、それが正しいか調査・実験する。ある材料や構造が作品に用いられていることを、調査分析を通じて立証する。ある表現を達成するために、どのような技法を用いるとよいか検証実験をする。

すなわち、「芸術実践研究」とは、エッセイ的解説や文学的表現ではなく、先行研究のレビューと複数の研究方法を組み合わせる行う学術研究の一種である。そして方法論自体は論文の中で明確に記述される必要がある。

理系の実践研究における手法である量的研究に該当するものは、おそらく技法や材料等（例えば、漆の乾燥時間と湿度の関係性を素材を変えてテストした結果や、銀箔を硫黄で硫化させる時間とグラ

ム数と色味の変化など) や、ワークショップの参加人数と成果物の個数といった数値化できるデータである。それ以外のほとんど全てが質的研究に該当すると推測される。また、量的研究であっても、表現において含まれる微妙なニュアンスや、ワークショップ参加者の様子といった質的な記述が必要になり、混合研究法となるだろう。

1.3 制作と研究の関係性

ここまでの博士課程そのものや実践研究とは何かといった項目は、成果報告書で明確な指針が示されていたのに対し、詳細については「美術研究科リサーチセンターの教育効果に関わるスタッフ・レポート」にある指導員それぞれの所感に頼ることになる。特に、制作と研究の関係性については、はっきりと断定した記述はない。よって、これらをもとに独自にまとめ直し、芸術実践論文の中にある制作と研究の関係性を整理する手がかりとしたい。ここでは2008年度と2012年度の「スタッフ・レポート」を主な資料とする。

まずは論文構成の中で、執筆者自らが制作した作品（以下、自作）の位置付けがどのように説明されているのかを取り上げる。各指導員によってニュアンスが異なるが、大きく二つに分けることができる。

表7 芸術実践論文における自作品の位置付け
（「成果報告書」より筆者が作成）

自作を論の根拠にする	自身が掲げた問題設定を自作品によって「実証あるいは検証」していく論の展開 ¹⁹
自作の意義を結論にする	(論文構成の) 結論として自作品の意義について再検証する ²⁰
	執筆者の制作に至る動機やテーマを掲げ、それについて客観的に論じながら自作を検証していく論文 ²¹
	自分の作品制作に関わる複数のテーマを立てて一般的・客観的に論じたうえで自分の作品制作に関連づけて述べていくというスタイル ²²

そもそも一般に研究とは、「未だ明らかにされていないことについて、自ら問いを立て、その答えを明らかにすること」と定義される。つまり、この上記二つの自作の位置付けは、一見似ているようで、実際には「問い」と「答え」の設定の方法が全く異なっている。前者の「自作を論の根拠にする」場合は、「問い」と「答え」は自作から独立している。自作はその「問い」を検証するためのピースなのである。後者の「自作の意義を結論にする」場合は、「問い」と「答え」はどちらも作品と不可分である。なぜなら、「自作とは何か？（自作の意義は何か？）」が「問い」であり、それを検

証した結果が「答え」だからだ。

さらにその詳細を確認していきたい。各自の報告の中で数名が芸術実践論文のタイプ分けをしている。そのうちの2名の分析を紹介したい。

表8 芸術実践論文のタイプ分け
 (「成果報告書」より筆者が作成)

栗田大輔「論文指導並びに『実技系論文』についてのレポート」より	五十嵐ジャンヌ「二年次対象授業『論文作成技術演習』と最終学年次学生への論文執筆サポートに関するまとめ」より
データや数値を根拠に具体的かつ実証的に、時系列順で材料や手順などについて論じるもの（文化財保存と一部の日本画） ²³	①実験や調査に基づく論文 研究目的を明記し、そのために有効な実験や調査を行い、得られた結果から考察をするもの。もしくは、フィールドワークで得られた事象や体験を整理・分析して考察を進め、フィールドの世界観の構造を分析し、この研究が自作品とどのように関わるのかを論じたもの。（保存修復、先端芸術表現） ²⁴
自身が興味を惹く抽象的な哲学的言説や芸術作品を参照・分析しながら自作品の意義について再検証するもの（絵画、彫刻、デザイン、工芸、建築、先端表現専攻） ²⁵	②作者の体験に基づいたモチーフと感覚や感情をテーマとした論文 作家の体験に基づき、感情的なものを伴う、一つの言葉では置き換えられない、作家独自の視点に基づく感覚を論じたもの。例えば、孤独、枯れ、静寂感など。作品の中で具体的なモチーフが表されている場合には、モチーフを選択した理由について個人的な体験を述べる。他の作家の作品、さらに過去の自作品を作家自らの視点で分析し、既存の作品と自作品とを比較することで自作の創性がどこにあるのかを理解させる。（日本画、油画、工芸） ²⁶
	③モチーフのない抽象的な感覚、状態や状況を中心に扱う論文 例えば、更新、不在、共鳴、あいまいなどをテーマとしたもの。作品が示す状態を観者に与える、もしくは共有してもらうことを作品制作の意図の一つとする作家である。思想家や小説家などの文章が引用されることが多い。哲学や記号論、情報学など理論的なバックグラウンドのもとに論を進める。このような論文では個人的な経験よりも社会やそのシステムへの関心が強い傾向がある。（油画、デザイン） ²⁷
	④アイデンティティの問題を扱う論文 制作行為を行うにあたっての背景や自作品の背景が自らのアイデンティティの問題と直結していることを強く意識する論文。美術史の中での自作品の位置を確認したり、留学生では自作品を自国の文化的背景と日本での経験のもとに生まれた作品と位置付けたり、歴史や現代を踏まえて自身が制作する作品の方向性の正当性を裏付けたりする。（工芸、デザイン、先端芸術表現） ²⁸

栗田の前者と五十嵐の①が同一カテゴリーで、栗田の後者と五十嵐の②③④が同一カテゴリーだと見なすことができ、五十嵐の方がより抽象的なテーマを扱うグループを細分化していることがわかる。

先ほどの論文構成の中での自作の位置付けと、この芸術実践論文のタイプ分けを合わせると、「自作を論の根拠にする」＝「データやフィールドワークを根拠に具体的に時系列順で材料や手順などについて論じるもの」（主に文化財保存と年によっては別の一部の専攻）と、「自作の意義を結論にする」＝「抽象的な哲学的言説や芸術作品を参照・分析しながら自作品の意義について再検証するもの」（文化財保存以外のほとんどの専攻）の二つのパターンとなる。

1.4 研究が作品制作に及ぼすメリット・デメリット

「スタッフ・レポート」の上記の分析以外には、指導中に問題を感じた点が報告されている。芸術実践論文を書くという行為が執筆者本人にどのような影響を与え、それがどのようなメリットとデメリットに繋がるか、数名の報告者が言及している。表9は比較的似たような観点から言及されているトピックを左右に配置しまとめたものである。

表9 芸術実践論文の執筆によって起こるメリット・デメリット
（「成果報告書」より筆者が作成）

メリット	デメリット
「作家」ならではの造形に関する言葉の独自の定義を、うまく言語化し、説明できると、その論文は、造形作品と言葉が結び付いた、密度の高い、オリジナリティーのあるものに変容できる ²⁹ 。	作品制作において感覚というレベルで漠然ととらえているものを言語に翻訳していくという作業に困難を感じる学生が少なくなかったようだ。その際に、文章化作業が自らの制作に則した翻訳というよりは後付的な説明になってしまう傾向も多分にある ³⁰ 。
自身の作品や考えを客観的に見るようになり、それによって思索をまとめることができるようになる ³¹ 。	論文を通して作品や制作を言語化した結果、作品が以前のものとは比べて観念的で説明的になってしまう ³² 。
自分の中で考えがまとまることにより、客観的な意見を聞くことができるようになったという回答者が9割を超えた ³³ 。	論文を意識することで時間を割かれ制作に集中しにくくなったとした回答者が半数を超えている ³⁴ 。
自身の制作について論文を執筆することは、作品の主題、問題を明確に意識する契機となり、その重要性を認識するに至ったと考えられる ³⁵ 。	スケジュール上、作品の完成と論文の完成が同時に進むので、先に論文の締め切りがあり、論文の結論部分が浅いまま一旦提出される。二年次学生は論文の構成要素を整理し、論文の流れを決めなければいけない ³⁶ 。
「作品分析を行う美術館学芸員あるいは研究者のための参考資料」になる ³⁷ 。	

デメリットとして、表にあげた例以外にも多くの報告者がスケジュールについて言及している。実践に基づく研究は、実践が行われないと研究を進めることができないにもかかわらず、作品の発表が論文の締め切りと同時期なので必然的に先に文章を進めなければならない。「自作を論の根拠にする」場合と「自作の意義を結論にする」場合のどちらもが、自作が完成していない（作り終わっていたとしても、展覧会が始まっていないので、インスタレーションの形態を見ることができず、鑑賞者のフィードバックが一切ない）状態で論文を完成させなければいけないのである。

この節で見てきた通り、美術作家が書く書類の文章のそれぞれに形式と目的があるのと同様に、論文にも決められたフォーマットがある。それに沿っていないものは、アーティストの自由な記述としては価値があるかもしれないが、学術論文としては認められない。なぜならば芸術実践研究が、学術研究のうちの実践に基づく研究のうちの一つであることが前提となるからだ。芸術実践論文は新たな知見を付け加えるものであること、新規性（オリジナリティ）があること、先行研究の批判的検討が含まれていること、という論文の要件を満たし、自分で問いを設定し文章を用いて答えを導き出すことが求められる。そのために適切な研究方法で調査を行い、その方法論が本文に記載されていることも必要な条件である。制作者が自らの作品について論じるうえで、論文の中での自作についての位置付けはふたつのパターンが確認された。ひとつは自作を論の根拠にするもので、もうひとつは自作の意義が論文の結論となるものである。レポートでは後者のうちどのような内容が多いかが報告された。そもそも芸術実践論文を書くことには、メリットとデメリットの両方が認められた。思考を言語化することに苦勞する一方で、それがうまくいけば論文はオリジナリティのあるものになる。論文を書くことによって作品についての考えがまとまり、客観的になれるメリットがある一方で、文章が後付けの説明になってしまったり、作品が観念的になってしまったりする。芸術実践論文はその特性上、作品が未完成の状態では論文を執筆することができないにもかかわらず、先に論文の完成を強行せざるを得ないスケジュールとなっている。以上が、主に成果報告書から抜粋し、確認した芸術実践研究の特徴である。

2 分析・具体例

2.1 芸術実践論文のマッピング

本節では、成果報告書の発刊以降にあたる2013年度から2020年度までの「芸術実践論文」（芸大リポジトリ³⁸を参照）のうち、「美術研究科の美術専攻（日本画、油画、彫刻、工芸、デザイン、建築、

表10 分析した論文の数

	日本画	油画	工芸	デザイン	彫刻	建築	先端芸術表現	文化財保存学	美術教育	美術解剖学
2020年度	3	8	4	1	2	1	4	3	0	0
2019年度	3	6	5	3	2	0	5	4	1	1
2018年度	3	2	4	2	1	0	2	7	0	1
2017年度	1	6	6	1	3	0	6	6	1	0
2016年度	4	11	4	0	1	0	3	6	0	0
2015年度	4	4	2	1	3	1	5	6	2	0
2014年度	4	5	5	0	1	1	6	6	1	0
2013年度	2	4	4	3	2	1	5	7	1	1

先端芸術表現) 及び文化財保存学専攻)、そして成果報告書には書かれていなかったが美術解剖学と美術教育も含めて分析した結果を示す³⁹。それらの論文要旨の中の、論文の目的、研究方法について書かれている部分から分類を行った。要旨から傾向が読み取れず、本文の閲覧が可能なものに関しては論文の本文も参考にした。

表6の研究のアプローチ方法の分類と、表7の芸術実践論文における自作の位置付け、表8の芸術実践論文のタイプ分けを参考に「論文の構成」と「研究手法」を分析した。そして、研究手法を「理論」主導から「データ」主導の横軸、論文の構成を「自作を論の根拠とした論文」から「自作の意義を結論とした論文」の縦軸にして、4象限のマッピングを試みた。専攻ごとに大まかには傾向が見られるが、それよりも個々の作品や思考によって論文構成が決定されることが明らかになった。

実際に分析する中で判明したことは、研究手法としては必ずしも実践的研究の手法を採用せず、理論中心で論を組み立てている論文が多く存在することである。その場合には、芸術実践において発見した内容を、各論証同士の関係性を補完するものとして使用していた。理論とデータの区分には、哲学などの人文学の理論をそのまま使用し論じるものを理論の側に位置付けた。データの中には、具体的な実験に基づいて得た数値的な根拠はもちろんのこと、実践研究における質的研究の手法（フィールドワークの記録やインタビューなど）を使用したものも含まれている。論文の中で理論とデータの両方を使用するものは左右の中間に位置する。ただし、質的研究の中の手法としての妥当性は考慮せず、執筆者自身の体験や感情を主観的に書き連ねたものであっても、他者へのインタビュー等と同等に扱った。

縦軸に関しては、論文の中で自作そのものについてほとんど触れていないものが一番上に位置する。なかには全く自作に触れず、制作者の立場を前提としない純学問に近いスタンスのものもあった。一

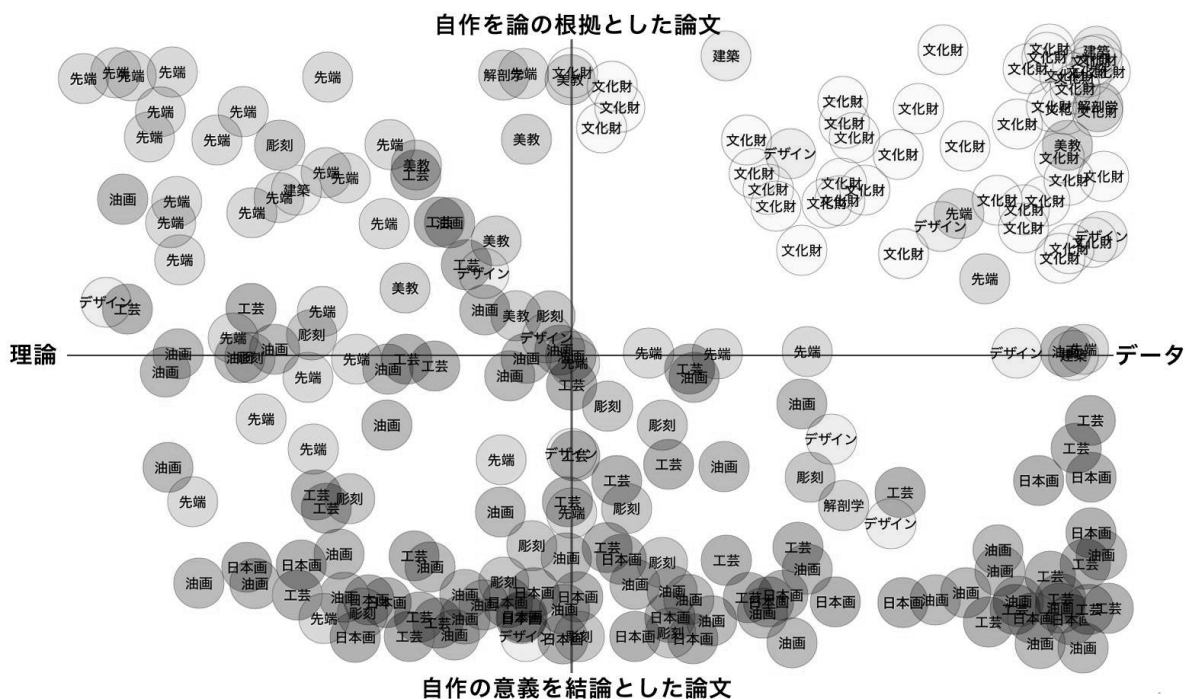


図1 2013年度から2020年度の芸術実践論文（224編）のマッピング結果

番下は自作の意義を明らかにすること以上の論文の目的が見いだせなかったものが位置する。論文の体をなしていないものに関しては、最も右下に配置した。

このマッピングのエリアを4つに区切り、各エリアごとに特徴を見ていきたい（図2）。右上のAは、自作（文化財保存学の場合は対象とした過去の作品とそれに対して制作した模写・模刻など）を論の根拠として、新しい知見を示す論文となっている。文化財保存学は論文中で明確にデータを示しており、全てエリアAに収まった。審査作品が提示されず、実験で得たデータに基づき素材や技法の研究を行った論文は最も右上に位置している。これは具体的な実験結果や技法の試作とその結果が示され、妥当性が高い⁴⁰。ただし、オリジナルの制作物を扱った論文でこのエリアに位置するためには、客観性の高いデータを使って自作を解説しながら新しい知見を明らかにすることを目指す必要がある。博士審査作品がその時に発表される同年代の新作である以上、数値化可能な手法をメインにしない限り、その難易度は非常に高いだろう。ワークショップ形式の作品や、設計上の数値が示せるものなど、作品の形式が限られる印象を持った。文化財保存学以外で該当したのは一部のデザインと美術教育、建築、先端芸術表現である。

右下のBは実践に基づく研究の手法を中心に使いながら、自作の意義を明らかにする論文となっている。特徴としては表8の②に合致する。作家自身の実感に基づく記述が多いため、表9の作家の一

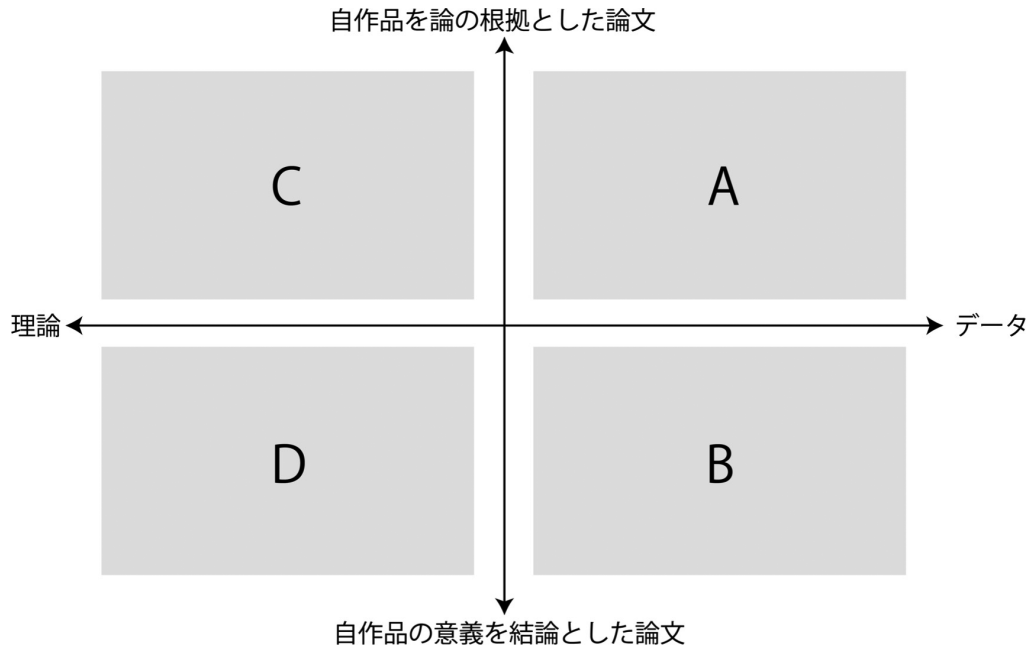


図2 4象限のエリア4分類

次資料としての価値が高いものだと推測できる。しかし、客観的とは言い難い資料も多く含まれているため有用性に乏しく、執筆者＝制作者の作品の一次資料以上の価値を持たせるのは困難に思える。日本画、油画、工芸が多く集まった。

左上のCは、研究手法としては文献を理論的に読み解き、概念を構築して自作を論の根拠として使用し、新知見を加えることを目指す論文である。他の研究にも応用できる可能性を秘めているといえるだろう。論文の中の一つ一つの考察同士を繋げる根拠として、実践の中で得た考えを使うことで、第三者が行う研究では突飛になってしまう発想を作品で繋げることが期待できる。ところが、理論を中心にしているため実践に基づく研究としての説得力に欠け、一つ一つの理論を純学問ほどの厳密さで考察できていない場合には、信用に足らないものになってしまう。先端芸術表現はこのエリアを中心としている。

左下のDは、Cと同様に理論を中心に組み立て、結論として自作の意義を明らかにする構成である。表8の③と④が該当する。Bと同様に一次資料としての価値が中心となるが、作家自身の実感をどこまで厳密に理論として考察できるかが、論としての説得力にかかってくるだろう。

2. 2 具体例『人形写真論』

このマッピングを行う際に、各論文の論文要旨を参照し、縦軸の論文の構成と、横軸の研究手法に

当てはめた。一般的な論文要旨の書き方に則っていないものも見られたが、その場合は文章を読み解くことで分類した。

例として筆者自身の博士論文『人形写真論』をあげて、その手法を具体的に解説していきたい。まずは論文要旨の中から、「どんな目的で」「何」を「どのように」研究するのかという部分を抜き出した。『人形写真論』の場合は要旨のうち、この範囲の文章が対象となる。

本論の表題である「人形写真」とは、人形を被写体にすることで独自の表現効果が生み出された写真作品を指した言葉である。(中略)本論は、現代における「人形写真」の構造と表現効果の範囲を実践的立場から明らかにすることを目的とする。全体を通して、これまで「人形写真」を制作してきた筆者の自作のリファレンスを例に、被写体である「人形」と手段である「写真」の二つの観点から考察を進める。本論の第一章から第三章は、タイトルを表題に冠した人形を題材とした私の3つのアートプロジェクトの制作過程において参照した文化的事象一般を領域横断的に分析する。第四章では、「人形写真」の表現効果と有効な範囲を示す。

ここからさらに簡潔にキーワードを抜き出すと、以下ようになる。

「人形写真の構造と表現効果の範囲を明らかにする」ために「筆者の自作のリファレンスを例に」、「人形」と「写真」の「文化的事象一般を領域横断的に分析する」。

「美術史・写真史における『人形写真』」自体は既存の論であり、そこに新知見を加える構成だ。これは「自作を論の根拠とする論文」なので縦軸は上側に位置する。ただし、作品について触れている分量が多く、各章の中で作品の意義を証明しながら進むため、中央よりやや上くらいとした。一つ一つの論証自体は理論がベースとなっているので横軸は左側である。くわえて、一つ一つのトピックを結びつける発想は芸術実践の中から発見した視点を根拠としているため、中央よりもやや左くらいに位置する。つまり、エリアとしてはCとなる。このようにして、他の全ての論文も分類を行った。

さらに、芸術実践論文を実際に執筆した当事者として、論文に加えて作品制作のことも含め振り返っておく⁴¹。

筆者は執筆当時、「自作を論の根拠にする」構成をとりながら、「抽象的な哲学的言説や芸術作品を参照・分析」することで、「従来の学問的体系に何か新しい知を加える」ことを目指せるのではないかと考えていた。言い換えると、実践に基づく研究だからといって、最初から純学問で目指す成果

を諦めるのではなく、実践に基づくアプローチ方法で純学問に迫る新しい知見に到達することを目指せるのではないか、とっていたのだ。立脚する理論としては人形については表象文化論を、写真については写真論を選択した。本来ならその二つは別々の論としてしか論じることができないが、芸術実践論文だからこそ、二つを結びつけることができると考えた。すなわち、計画段階からCに位置するように心がけていた。

そして、博士審査作品自体を論の根拠として機能させるために、論文の構想段階から作品の構造を計画していた。『人形写真論』の研究目的は、「人形写真の構造と表現効果の範囲を明らかにする」ものである。研究成果の一つ目は、既存の「人形写真」では定義からは外れていた「セルフ・ポートレート性の内在」を、自らの実践によって証明し学説に付け加える、という部分である。成果の二つ目は、「人間と人形の見分けがつかなくなったときに、認識不可能となって表現効果が消滅する」ため、「人形写真」の有効な範囲は「人間と人形の見分けがつく状態まで」であることを明確にしたことである。博士審査作品は、この二つをクリアする根拠となる必要があった。博士審査作品は、《Untitled》8点組み「あなたを離さない」シリーズより（2020）である。自分の頭部を型取りして作った人形と一緒に撮ったセルフ・ポートレートだ。作品制作の手法としてはセルフ・ポートレートであることが、仕上がりのクオリティとしてはどちらが人形か容易に見分けられないことが必要条件だった。

論文で取り上げているその他の自作は、2016年から2020年の間に発表した中から厳選した4作品だけである。これらは全て論文執筆の時点で展覧会が終わっていたため、鑑賞者の反応や、批評に対する応答を根拠とすることができた。論を展開し「人形写真の構造と表現効果の範囲を明らかにする」ために、必要な作品を選んだ。

このようにおおむね自分でコントロールして執筆や制作を進められたが、成果報告書にあるデメリットの通りスケジュールの問題があった。博士審査作品自体は11月に完成していたが未発表のため鑑賞者からのフィードバックが得られていないまま、論文執筆を進めざるを得なかった。そのため、他の作品では書くことができた鑑賞者の反応を、博士審査作品では記述することができず、どのように鑑賞されたのかという事実がないまま、どのように見えるか（この場合は「人間と人形の見分けがつくか」）を予測に基づいて書くほかなかった。

2. 3 『人形写真論』における作品制作と研究

筆者は論文とは無関係に通常の作品制作の時から、文献を参照し先行作品をリサーチしている。作品を計画するときには必ず企画書を作り、展覧会ではステートメントを公開している。すなわち、ス

ステートメントを書いた時点で知識と作品との関連の整理は大まかには完了している状態だといえる。一つの論文としてまとめるときには、個々のリサーチをさらに大きな視点で包括する必要があったが、基本的には作品制作と同時に研究を行っているのだ。

上記の理由から筆者にとっては、スケジュールに関すること以外にデメリットをほとんど感じなかった。筆者は「作家独自の言葉」で思考せず、一般的な使用法とは違う言葉をそもそも使用していない。自らの感覚や体験は作品制作とはそれほど関係がないので、苦勞して言語化する必要もなかった。もちろん、日常的な出来事が作品の発想に結びつくことはある。しかし、それは一般向けのメディアのインタビューで答える内容であり、「問い」を立てて「答え」を導き出す導線の中に挟まる余地はほとんどない。普段の作品制作の時点で制作と研究が同時に進行していたため、論文を執筆したことによって作品が説明的になったり、論文が後付けの説明になることもなかった。思考の量自体は論文があってもなくても同じであるが、実際に執筆する時間を確保するスケジュール管理は大変だった。ただし、論文を執筆したことで更新された考えのおかげで後に次の作品の展開に移ることができたので、この点はメリットといえるだろう。

筆者の作品を研究する研究者は、論文よりもステートメントとインタビューから言葉を引用することが多い。そのため、論文は純粹に作家の一次資料として機能しているわけではないように感じる。その代わり、筆者自身の肩書きはアーティストでありながら、リサーチの手法であった表象文化論・写真論・人形論の研究者とシンポジウム等で同席する機会をもらえている。

ひとつ付け加えるとすると、筆者は決して文章を書くのが得意な方ではない。「スタッフ・レポート」によると博士論文で「ほぼ初めて論文を書く⁴²」学生が多数で、「全体の構成を持った論文を書いた経験⁴³」が浅く「『てにをは』や誤字脱字の修正⁴⁴」が必要なレベルで、そもそもの文章執筆が得意ではないとある。筆者も博士論文以前に書いたものは修士課程の作品解説論文だけであり、ほとんど同じ状況であった。

2. 4 研究と作品制作は似ている

前述の通り、筆者自身はほとんど論文執筆の経験がないにもかかわらず、研究と作品制作の齟齬を感じることはなかった。その理由は作品制作と同時に企画書とステートメントを進めていたからだだと推測できる。特に、企画書で必要な情報と、研究計画書で必要な情報は似ている。展覧会企画書と研究計画書の類似点を表11で示した。

表11 研究計画書と展覧会企画書の類似

	研究計画書	展覧会企画書
概要	研究の大枠、テーマ、スケジュール	作品の構造説明、テーマ、スケジュール
背景・問い	なぜその研究を行うのか、問題の背景	なぜその作品を作るのか、同時代性
独自性・創造性	新規性があるか	どういった点で価値のある表現か、オリジナリティ
具体的に	何をどこまで明らかにするか、具体的な研究手法	何をどのように表現するか、具体的なモチーフ、素材、サイズ、手法

このように、書くべき内容の傾向は非常に似ている。両者とも計画段階で第三者を説得する目的で作成される。まだ形にはなっていないが、実現したら成果をあげそうだと納得させるためのものである。そのために掲載すべき情報が共通しているのだ。企画書や計画書の段階では、中心となる作品そのものや調査結果について書くことはできない。ただし、その狙いや構造、テーマ、新規性があるといえる理由、具体的な手法などを明確にしておかなくてはならない。展覧会の企画書と研究計画書というそれぞれの計画を同時に進行させ、作品の制作を開始する時点で学術研究に必要な基準を満たすことが重要なのである。

そもそも根本的に、作品制作自体が研究とよく似ているとも言える。表2の勉強、調査、研究の分類を作品制作に当てはめてみよう。表12は、表2の右側に対応する作品制作の段階を追加したものである。

作品制作を行うには段階を経る必要がある。すでに体系化されたカテゴリを勉強した上で調査を重ね、研究が成り立つのと同様に、作品制作もまた、伝統技法や先行作品をふまえた上で試作を行い、

表12 研究と作品制作の類似
(成果報告書25頁に筆者が加筆)

勉強	[既にあるもの(体系化されたもの)を] 学ぶこと、習得すること	既存の技法の習得、先行作品を知る、情報収集	制作
調査	[何かを明らかにするために] 必要なデータ(資料となるもの)を集めること	新しい素材・技法のテスト、テーマに沿ってリサーチする	
研究	[未だ明らかにされていないことについて] 自ら問いを立て、その答えを明らかにすること	テーマと合致する手法で作品制作を行う	

最終的に一つの完成作品を作り出すのである。思いつきで始めた試作であっても、それを作品として成立させるためには俯瞰して判断し、具体的に計画を立てる。これらの点から、作品制作と研究は類似していると言えるだろう。言い換えれば、制作と研究はパラレルな関係なのである。制作を進めればその実践の中から考えが深まり、研究も進む。文献を読んだりデータを分析すれば作品に反映することができる。テーマと手法の両方が更新されることで、制作と研究の双方が前進するのである。

この節では、芸術実践論文224編を分析し、制作と研究の関係について考察を行った。マッピングから分かる通り、中には全く自作に触れずに純学問と同じように理論を組み立てる論文（図の最も上部に位置する）もあるが、大部分は「自作を論の根拠とする」構成から「自作の意義を結論とする」構成までの縦軸のグラデーションに位置する。図の上半分は、執筆者が作家として思考している論を証明するための根拠として自作が機能する。図の下半分は、より直接的な作品解説論文であり、制作した作品のバックグラウンドを補強する論文となっている。横軸の研究手法は、他の分野の実践に基づく研究のアプローチ法であるデータを用いたものが右側に位置している。図の左側に位置する論文は理論型であり、個々の論証は実践に基づく研究の手法というよりは、純学問の思考に近い。作品制作を通して得られた気づきが、発想の飛躍を突飛なものにせず、一つの論としてつなぐ役目を担っている。このように論の中での自作の位置付けと、対象に対して適切な研究方法を選択し組み合わせることで、その論文の独自性が生まれていることが明らかになった。

筆者が『人形写真論』を執筆したときの状況から導き出された作品制作と研究の関係性は、「制作と研究はパラレルである」ということだ。展覧会企画書と研究計画書との類似、そして作品制作と研究のプロセスの類似からして、それらは論文執筆の有無に関わらず同時に行われるものなのである。

おわりに

本稿の目的は、芸術実践論文の分析を通して、美術作品の制作と研究の関係性を明確にし、その意義を明らかにすることであった。芸術実践論文は学術論文として形式に則ることが前提となっている。新たな知見を付け加えること、新規性（オリジナリティ）があること、先行研究の批判的検討が含まれていること、という論文の要件を満たし、自分で問いを設定し文章を用いて答えを導き出すことが必要である。そのために適切な研究方法で調査を行い、その方法論が本文に記載されていなければならない。ただし、2013年度から2020年度までの芸大の芸術実践論文（美術分野）を分析してマッピングを行った結果、芸術実践ならではの論文構成も許容されていることが判明した。特に芸術実践論文

において自作をどう位置づけるか、またどのような研究手法を採用するかといった論文構成に多様性が見られた。既存の学説を「理論」的に検証していくものと「データ」に基づいて検証していくものどちらの研究手法を採用している場合も、作品制作の経験から得た思考や情報から論文の中核となる部分が導き出されていた。マッピングの際に大きく四つに分類したところ、専攻ごとに大まかな分布の傾向が認められたが、個々の作品形態や思考の方がその決定により強く影響を及ぼしていることがわかった。

筆者自身の博士論文『人形写真論』は、美術史・写真史における「人形写真」に新知見を加える構成で、作品制作という実践を通して得た視点が表象文化論と写真論の二つを繋げる構造となっている。「人形写真の構造と表現効果の範囲を明らかにする」ために「筆者の自作のリファレンスを例に」、「人形」と「写真」の「文化的事象一般を領域横断的に分析」した。一つ目の研究成果は、既存の「人形写真」では定義からは外れていた「セルフ・ポートレート性の内在」を学説に付け加えたことである。二つ目の研究成果は、「人形写真」の有効な範囲は「人間と人形の見分けがつく状態まで」であることを明確にしたことである。

マッピングの中では「自作を論の根拠とする」構成で「理論」主導の手法という分類であるエリアCに位置する一つの具体例として、この『人形写真論』を例にあげ、芸術実践論文と作品制作について成果報告書と照らし合わせながら検討した。筆者の芸術実践の特徴として、展覧会企画書と研究計画書を同時に作成することがあげられる。すなわち、作品を発表する時に公開するステートメントを書いた時点で、芸術実践論文の本文にあたる部分はおおむね執筆された状態となる。ここから推測するに、制作と研究は作家を支える車輪の両輪であり、同時に進行することで互いに補完し合う関係なのだといえるだろう。芸術実践論文は執筆者本人にとって、制作や作家活動全般を前進させるものになり得るのだ。本稿がこれから芸術実践論文を執筆する人にとってのヒントとなること、そして芸術実践論文に触れたことのない他分野の研究者が参照するときの手引きになることを期待する。

本稿での分析を通して、芸術実践論文は美術作品の制作の経験を通して獲得した視点に基づいて組み立てられていることが判明した。これは芸術実践論文ならではの特徴であり、第三者が既存の完成作品を論じる論文とは異なっていることが予想できる。しかし、これを検証するためには、本稿では対象外とした芸術学の論文との比較が必要になってくるだろう。また、アーティストが書く論文以外の文章のうち、「論考」にあたるその作家独自の芸術論と「芸術実践論文」には形式以外にどのような違いがあるのか、本稿では扱うことができなかった。これらを今後の課題としたい。

注

- 1 東京藝術大学大学院学則第19条及び 第5条
- 2 東京藝術大学 芸術リサーチセンター（平成20~24年度）『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.11
- 3 筆者が大学院先端芸術表現科の修士課程で作品解説論文を書く際に授業内で勧められたのは以下の二冊である。
戸田山和久『論文教室レポートから卒論まで』NHKブックス、2012年
河野 哲也『論文・レポートの書き方入門』慶應義塾大学出版会、2002年
- 4 御子柴ふゆ『統計を用いた論文作成法【美術系論文編】』北大路書房、2013年 があるが、基本的に特定の人を対象に何かを解消する目的で制作された作品（デザイン科など）の目標達成を検証するという論文構成を理想としているので、多くの専攻は参考にするのが難しいと思われる。
- 5 東京藝術大学 芸術リサーチセンター（平成20~24年度）『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.5
- 6 筆者は2009年に芸大の絵画科日本画専攻に入学し、2013年に大学院美術研究科先端芸術表現専攻に進学、2016年に同専攻の博士後期課程に進学した経歴を持つ。筆者自身は芸術実践論文を執筆したことで、美術作家としての活動に広がりが出た。展覧会で作品を展示する以外にも、関連分野の研究者と共著を出版したり、研究者が登壇するシンポジウムに招聘されたり、雑誌にエッセイの連載を持ったりしている。
- 7 ギルダ・ウィリアムズ、山下萌子（訳）、GOTOLAB（監修）『コンテンポラリーアートライティングの技術』光村推古書院、2020年、p.251
- 8 実技系専攻の学部4年生の卒業制作（卒業要件の実技課題）と修士2年生の修了制作（修了要件の実技課題）を一般公開する展覧会。
- 9 近藤克則『研究の育て方 ゴールとプロセスの「見える化」』医学書院、2018年、p.3
- 10 近藤、2018年、p.10
- 11 銭 清弘「レジユメ | ケンダル・ウォルトン「透明な画像」(1984)」2018年、https://obakeweb.hatenablog.com/entry/transparent_pictures
- 12 成果報告書、2013年、p.12
- 13 成果報告書、同上、p.11
- 14 成果報告書、同上、p.12
- 15 成果報告書、同上、p.13
- 16 成果報告書、同上、p.13
- 17 成果報告書、同上、p.12
- 18 成果報告書、2013年、p.25
- 19 栗田大輔「論文指導ならびに「実技系論文」についてのレポート」2008年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.43
- 20 栗田、同上、p.44
- 21 和田圭子「リサーチセンターにおける活動報告－論文指導を中心に－」2012年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.58
- 22 石田圭子「論文指導についてのレポート」2008年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.45
- 23 栗田、2008年度、p.43

- 24 五十嵐ジャンヌ「二次対象授業「論文作成技術演習」と最終学年次学生への論文執筆サポートに関するまとめ」2012年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、pp.50-51
- 25 栗田、同上、p.44
- 26 五十嵐、同上、p.50
- 27 五十嵐、同上、p.50
- 28 五十嵐、同上、p.50
- 29 中西麻澄「作家」である学生の学位論文指導－「論文作成技術特別講義」の総括と、これから執筆する方へのアドバイス」2012年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.48
- 30 石田、2008年度、p.45
- 31 石田、2012年度、p.56
- 32 石田、同上、p.56
- 33 安藤美奈「美術研究科リサーチセンター教育効果調査」2010年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年、p.63
- 34 安藤、同上、p.63
- 35 安藤、同上、p.63
- 36 五十嵐、2012年度、p.50
- 37 栗田、2008年度、p.44
- 38 東京藝術大学リポジトリ <https://geidai.repo.nii.ac.jp>
- 39 芸術学は実践に基づく研究論文の形式を取らず、博士審査作品もないため、執筆者が日常的に作品制作を行っている場合でも原則として除外した。
- 40 「(文化財保存学の論文について) 実作での経験をもとにしながら論文によって言語化を図る試みは、技術を後世に伝達する意義において今後も大きな役割を占めると期待できる」栗田、2008年度、p.44
- 41 あくまで中央寄りのCのエリアに属する一例であるため、他の執筆者と異なる部分もあるだろう。
- 42 栗田、2012年度、p.53
- 43 中西、2012年度、p.48
- 44 栗田、同上、p.53

参考文献

- 栗田大輔「論文指導ならびに「実技系論文」についてのレポート」2008年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年
- 安藤美奈「美術研究科リサーチセンター教育効果調査」2010年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年
- 五十嵐ジャンヌ「二次対象授業「論文作成技術演習」と最終学年次学生への論文執筆サポートに関するまとめ」2012年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年
- 石田圭子「論文指導についてのレポート」2008年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年

ギルダ・ウィリアムズ、山下萌子（訳）、GOTOLAB（監修）『コンテンポラリーアートライティングの技術』光村推古書院、2020年

近藤克則『研究の育て方 ゴールとプロセスの「見える化」』医学書院、2018年

ロバート・ステッカー、森功次（訳）『分析美学入門』勁草書房、2013年、p.167

東京藝術大学 芸術リサーチセンター(平成20~24年度)『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年

中西麻澄「「作家」である学生の学位論文指導－「論文作成技術特別講義」の総括と、これから執筆する方へのアドバイス」2012年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年

和田圭子「リサーチセンターにおける活動報告－論文指導を中心に－」2012年度『東京藝術大学 芸術リサーチセンター成果報告書』2013年

銭 清弘「レジュメ | ケンダル・ウォルトン「透明な画像」(1984)」2018年、https://obakeweb.hatenablog.com/entry/transparent_pictures